

## 性の多様性に応じる学校に関する研究—授業作りから環境整備まで—

(2019 年度報告書・概要版)

◎吉谷 武志 (東京学芸大学国際教育センター)  
○原口 直 (東京学芸大学附属世田谷中学校)  
遠藤 真紀子 (東京学芸大学附属世田谷中学校)  
菊地 孝太郎 (東京学芸大学附属世田谷中学校)  
村上 恭子 (東京学芸大学附属世田谷中学校)  
角田 桜 (東京学芸大学附属世田谷小学校)

【キーワード】 多様性 セクシュアル・マイノリティ SOGI インクルーシブ 環境整備 参加

### 1. はじめに—調査研究の背景

近年、セクシュアル・マイノリティに関する各種調査研究では、セクシュアル・マイノリティに属する児童生徒は少なくとも 5%程度、多くは 12%~13%程度いるのではないかと推測されている<sup>i</sup>。しかしながら、すべての学級に少なくとも 2~3 人は該当児童が在籍することが予想される学校現場であるにもかかわらず、今日的な課題となっている「多様な子どもに応じた教育」を試みる際、必ずしもセクシュアル・マイノリティに属する児童生徒が想定されているとはいえない状況にある。こうした中、文部科学省でも従来からの見解を変え、セクシュアル・マイノリティに属する児童生徒の存在を想定し、行政も学校も、そしてすべての教員が意識を持って実践に取り組む事を要請している<sup>ii</sup>。こうしたことは、対応すべき時期であるにもかかわらず、学校教育においてはその実現にいたっていないという実態を示すものでもある。

本学の附属学校においては、こうした児童生徒の存在を想定し、各学校・園ではセクシュアル・マイノリティの子どもたちをも含む多様な児童生徒を想定した実践が既に取り組まれている実態がある。ただ、課題は個々の学校・園や本学の教職員が取り組んでいる実践や配慮、環境整備が、個別のままに止まっている嫌いがあることである。既に取り組まれている貴重な試み、実践や取り組もうとする意思を拾い上げ、見える化し、体系化して共有し、学内はもとより外部に発信することは、研究学校としての本学の学校・園の使命でもある。

以上から、本研究はセクシュアル・マイノリティに属する児童生徒を想定した多様な子どもたちへの教育を実践している事例を調査権空すること、実際に本学での授業実践に取り組むこと、附属学校内の環境の整備をはじめとする状況の改善のための基礎資料を得ることを試みた。

### 2. 本プロジェクトの目的と調査研究の実施内容

本課題を現在の学校の状況、さらに本学附属学校・園の現状に鑑み、本調査研究では、まず児童生徒、教員をはじめとする学校関係者がセクシュアル・マイノリティについて正しく理解し、その受け入れ体制の整備、校内や学級での環境整備、授業づくりなどにどのように取り組みうるのか、今なすべきことについて明らかにすることを試みた。そのためにまず、各地の学校での実地調査を行い、その検討を行った。また、附属学校（附属世田谷中学校及び小学校）の児童生徒の実態に合わせて、多様な生徒を想定し、生徒の理解を進める教育実践に、既存の条件に合わせて既に試みられている実践を構築し、多様な生徒を受け入れる学校のあり方を、セクシュアル・マイノリティの子どもたちに焦点を当てて追求することを目指して調査研究を実施した。

具体的には、こうした試みの手始めに 2019 年度においては以下のような調査研究を実施した<sup>iii</sup>。

#### ① 実践先進地区・先進校の訪問調査とそこからの知見の検証

各地での実践から、岡山県倉敷市教育委員会が 2016 年度(平成 28 年度)から課題研究の一つとして市内の学校を挙げて取り組んでいる児童生徒の性の多様性理解に関する実践研究を、全

国的な先進事例の一つとして訪問調査を実施した。

また、生徒の居場所と多様な生徒の相互理解の試みとして、埼玉県立飯能高校図書館の試みについて訪問調査を実施した。

## ② 研究授業等での工夫と授業実践

既に本学附属学校・園においても、自身の性のあり方に関して多様な感覚と理解を持っていると思われる児童生徒の存在は、教職員も意識している。こうした多様な児童生徒が在籍する事を前提として、附属世田谷中学校と世田谷小学校でプロジェクトメンバーによる授業実践を試みた。

## ③ 環境整備（図書館コーナー設置）による効果の検証を行った。

学校内の環境整備、特に性の多様性についての理解を支援する図書館のあり方について、関連図書の選書と展示を行い、また併せて生徒によるセクシュアル・マイノリティ理解に関する選書された図書の効果について、生徒による意見と読后感想の収集分析を行った。

## 3. 調査研究の得られた知見の概要

### ① 実践先進地区・先進校の訪問調査とそこからの知見の検証

調査では「性の多様性」に関する教育実践に取り組んでおり岡山県倉敷市教育委員会とその管内の学校を調査地として選定し、この課題を主に担っている教育委員会人権教育推進室を訪問し、同市教育が市内の小中学校全校で取り組む「多様性の教育」についての聞き取りを行うと共に、市内の中学校区を単位として行われた授業研究会や市内の養護教諭を対象とした研修会に参加し、基本的な考え方、公開授業とその課題の探求、さらに実践に関わる課題発表会（養護教諭）での追求事項など具体的な状況について、資料収集、インタビュー等実施した<sup>iv</sup>。

倉敷市の特徴は、文部科学省の通達(「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施について」平成 27 年)に基づく実践を進めるに当たって、特定の研究指定校のみで実践を進めるのではなく、人権教育の課題の一つとして市内すべての学校での実践を実現する方向でこの課題に取り組んだことにある。こうした取り組み、実践の推進は少なくともセクシュアル・マイノリティに関する実践的な取り組みに関する限り他の地域にはみられないものであり、先進的なものであると考えられる。特に、セクシュアル・マイノリティに該当する、または可能性のある児童生徒のことを、自分とは関係のないものとして捉えて他人事として受け取られることのないような仕掛けをしている点に特徴があり、そうであるからこそ市内全域での実践も可能となっている。その際、直接的にセクシュアル・マイノリティに関する知識、理解、そして支援などに特化するのではなく、セクシュアル・マイノリティを含む「多様な自分たち」について一緒に考えるということ、さらに児童生徒の発達段階に即して、小学校 1 年生から中学校 3 年生までの学習の原理を考慮し、ステップを策定して実践に臨んでいることが特徴である（図 1 参照）<sup>v</sup>。

すなわち、セクシュアル・マイノリティ理解にいたるまで、多様性の尊重＝性の多様性を認め合うための素地(Step1)、人の多様性に対する理解＝含まれるセクシュアル・マイノリティの理解(Step2)、そして人権課題としてのセクシュアル・マイノリティの理解(Step3)という段階を実践上の基本的枠組みとし、学校段階発達段階を考慮して、それにふさわしい単元、教材を工夫することで、児童生徒の人権意識の高揚に即して、このセクシュアル・マイノリティ理解を実現する事を目指した実践を実現しようとしていることである。

以上のような枠組みと中・長期的な人権実践としてこの課題を位置づけることで、とかく性的な事柄に対する異なる意見の対立があるこの課題に対して、すべての人（子ども）に必要な人権の尊重、人の多様性の認識と尊重という枠組みの中にセクシュアル・マイノリティ理解を位置づけることがなされ、全市挙げての実践に道を開き、合意がなされるようにした点は重要な観点であるといえる。

また、生徒の居場所作りとマイノリティ理解に取り組んだ学校図書館の実践例としての埼玉県立飯能高校図書館の事例<sup>vi</sup>は、生徒の多様性を承認し、居場所を提供し、そこでの図書やビデオ等による、

またその自由なアクセスを保障する工夫は、思春期の生徒の自分探しと多様性の尊重、当然視という視点による自己の承認に道を開くものとして、貴重な実践であることが見いだせた。

## ② 研究授業等での工夫と授業実践

性の多様性、あるいはセクシュアル・マイノリティ理解という事項は、特定の教科の特定の単位でのみ取り組まれるべきものではない。また、あるいは道徳や総合的な学習の時間においてのみ取り上げられるべきものでもない。むしろ

人間理解として、また自分作りや他者理解など将来社会に出て行く際に大前提となる人権意識の中核をなすものと考えられる。しかしながら同時に、各教科、各単位における学びの中で、人間理解を深める際に重要な要素になるものでもある。その意味で人のあり方の多様性について学ぶことを意識し、日常の学習活動の場で、時には明確に言及し、明示することもなくてはならないものである。

本調査研究では、プロジェクトメンバーの日常の教育実践でセクシュアル・マイノリティ理解を進める、性の多様性、人の多様性を理解し受け入れるに関わる実践にも取り組んだ<sup>vii</sup>。

原口は中学校3年生での音楽科「音楽を通してジェンダー（文化的・社会的な性差）について考え、思考を広げよう」において、演奏の多様性から音楽のジェンダーについて取り上げた。この授業をきっかけに、性別に関する様々な見解に興味を持たせる試みをおこなった。

遠藤は、附属世田谷中学校の特設の領域「生活学習」、「しなやかな心で前向きに生きる力の育成—中学校における心の教育を考える」において日常生活における暗黙の内に設定されている「性役割」について考え、現代の男女二元論に基づく性別役割観を理解し、それにとらわれない「めざしたい未来」を考えさせる実践に取り組んだ。

また、角田は小学校5年生の健康学習「単元：好きの多様性～自分らしさを考える～」において、思春期の入り口にある児童が日常的に抱いている「人を好きになる」という感情を受け止め、好きになる事の根本にある多様な性についての気づき、自分らしさということ友達と共に考える実践に取り組んだ。

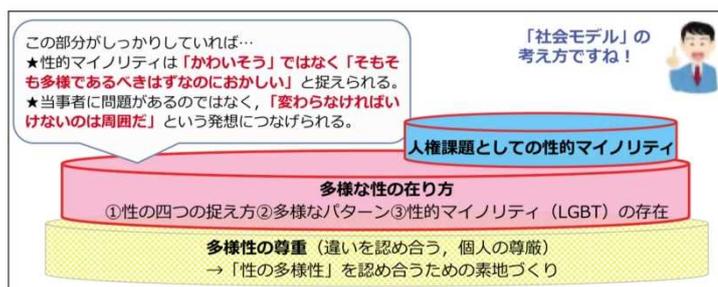
以上は、社会に暗黙の前提とされている男と女という性の規定や役割分担、そこに自分自身を当てはめることだけを求められるということでは見いだせない、多様な自分、多様な他者、多様な人の存在を尊重する視点を自ら探求させる取り組みとしてのセクシュアル・マイノリティに関わる視点による授業の試みである。

## ④ 環境整備（図書館コーナー設置）による効果の検証

学校の環境整備は、生活空間としての校内に、単に物理的な安全・安心な状況をもたらすだけでは止まるものではない。学校文化の一部として、物理的な環境整備は教育内容の達成にも大きな影響を与えることが考えられる。誰でもトイレを設置するなどの、まさに建物の構造を変えることは実際にはすぐにできることではないにしても、教室内の掲示や環境整備は比較的容易に変更できるものに属する。こうした環境整備の中でも、児童生徒の主体的な学習に大きく影響を与える学校図書館、図書室において、人の多様性、セクシュアル・マイノリティについて考えることのできるような環境整備、図書教材の配置とその効果測定を試みた。

附属世田谷中学校の図書室では、2019年度、通常の選書、展示の他にセクシュアル・マイノリティ、性の多様性に関わるコーナーを設置し、小学校から高校生向きに出版されている書籍から選び出した図書の貸し出しを、無記名で自由にできるよう配慮した。その上で、生徒が借り出して読んだ図書に対する感想や中学生の目で見えた「評価」を、自由記述形式で記述、提出できるようにした。

司書教諭(村上)によるこの試みにより、成人や保護者による性の多様性やセクシュアリティに関するイメージ、それを学ぶ素材としての書籍への評価と生徒自身による学び、性の多様性に関する意識



が前者のそれがともすれば既存の社会の枠にとらわれがちなの比べて、後者は自ら考え、性の多様性を書籍の提示する科学的な根拠をも含め柔軟に理解し、判断するという点で自由に学ぶ事ができていることを見いだすことができた。

#### 4. 成果と課題

本研究は、学校教育においても急速に可視化し、その教育や支援の必要性に迫られている児童生徒の多様性について、特にセクシュアル・マイノリティの児童生徒に焦点を当て、その実情、学校教育上の課題について、すべての児童生徒に花果くあるものとして捉え、教育上の対応を考えようとするものである。

2019年度の調査研究では、以上に述べたように、授業場面だけではなく、教室や教材、図書など、さまざまな観点から取り組んでいくべき課題であることを確認し、又、その実践の試みを進めた。特に、この課題はセクシュアル・マイノリティに属する生徒のみへの配慮ではなく、すべての児童生徒にとって重要な共通の課題であるという点からの試みであった。それはセクシュアリティは限られた人の課題ではなく、すべての人にとって共通の重要なものであるという観点から近年使用されることが多くなった SOGI(Sexual Orientation, Gender Identity)という言葉にも示されている。

人の多様なあり方を互いに尊重し、児童生徒が自己形成を成し遂げられるような、多様性を受け止められるような学校教育を、まずは本学の附属学校・園から、大学にそして日本の学校教育に発信すべきものであることは明白であり、さらに調査研究を進めていきたい。

さらに今後、諸般の事情により実施できなかった実地調査、校内体制整備、研修の機会の実現などに引き続き取り組んでいきたい。

付記：

##### 1. 謝辞

本プロジェクトの実施に当たっては、実地調査や情報提供、研究授業への助言、附属学校での実践への協力、実施授業の情報提供等で多くの方から多大な協力を得ました。特に、倉敷市教育委員会の松尾真治氏、飯能高校図書館司書湯川氏、埼玉大学渡邊大輔氏、認定非営利活動法人 Ribit の皆さん、に感謝申し上げます。

2. 以上に報告した内容の詳しい報告は、別にとりまとめる報告書に記しています。

---

<sup>i</sup> いのちリスペクト、ホワイトトリボン・キャンペーン『LGBTの学校生活に関する実態調査（2013）結果報告書』、電通ダイバーシティラボの「LGBT調査」2012、2015、2018 など。

<sup>ii</sup> 文部科学省「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」(平成28年4月)

<sup>iii</sup> 当初計画した附属学校・園の教師へのセクシュアル・マイノリティ理解と実践化のための附属学校・園全体に対する授業実践、意識調査、さらにそれを踏まえた校内研修、実践研究会（外部の当事者教師、実践家の招聘による）については、新型コロナウイルス等の蔓延による社会状況等により実施できなかった。

<sup>iv</sup> 調査は吉谷が2019年10月18日、原口が2019年10月30日、遠藤と角田が2020年2月5～6日に現地を訪問し、人権教育推進室での聞き取りでは主に松尾真治主幹から、同市の考え方を伺うと共に、訪問先の各学校長、教諭からの聞き取りを行った。

<sup>v</sup> 倉敷市教育委員会人権教育資料集2『性の多様性を認め合う児童生徒の育成I』3Pより

<sup>vi</sup> 埼玉県立飯能高校図書館（すみっコ図書館）司書、湯川康宏氏による情報提供より（2020年2月26日訪問）。

<sup>vii</sup> 実践は以下のもの。

原口直実践：中学校第3学年音楽科「音楽を通してジェンダー（文化的・社会的な性差）について考え、思考を広げよう」（2019年6月15日）

遠藤真紀子実践：中学校第3学年生活学習「しなやかな心で前向きに生きる力の育成ー中学校における心の教育を考える」（2019年6月15日）

角田桜実践：小学校5年生健康学習「単元：好きの多様性～自分らしさを考える～」（2019年1月10日～31日）